日台ビジネス交流推進委員会・日本台湾交流協会奨学金留学生との交流会の取り組み

日台ビジネス交流推進委員会は、平成28年度より日本台湾交流協会奨学金留学生との交流会を開催しています。この「日台ビジネス交流推進委員会・日本台湾交流協会奨学金留学生との交流会」（以下、交流会）は知日派人材育成の観点から、奨学金留学生に対する日本の企業紹介・理解促進を目的とし、奨学金留学生と企業が密に交流できる機会を提供しています。

令和６年度は、日台ビジネス交流推進委員会より４社１団に参加いただき、奨学金留学生は北海道から長崎まで日本各地から集まり、交流が盛んに行われました。また、令和５年度に開催された交流会では、実際に学生と企業とのマッチングが結実しました。

今回は日台ビジネス交流推進委員会の委員である三井金属株式会社に話を伺い、交流会を機に同社で就職をすることになった奨学金留学生にインタビューを行いました。交流会の取り組みと、日本での就職活動についてご紹介いたします。

参加企業の声

当社（三井金属株式会社）は、非鉄金属事業を基盤に、機能材料や電子材料の製造・販売を行う企業として、長年にわたり台湾との強固な関係を築いてきました。その背景には、台湾がアジアにおける電子産業の中核であり、当社の事業戦略において重要な位置を占めていることがあります。

1970年代後半、台湾政府が電子工業化を推進する中、当社はその成長性に着目し、現地法人を設立しました。そして1980年、台湾南投市に「台湾銅箔股份有限公司（TCF）」を設立し、電解銅箔の製造を開始しました。この製品はプリント基板やリチウムイオン電池など、電子機器に不可欠な素材であり、台湾のIT産業発展とともに需要が拡大しました。さらに2000年には台中市に「台湾特格股份有限公司」を設立し、スパッタリングターゲット材や薄膜材料の事業を展開しました。これにより、半導体製造装置向け保護材や電子部品材料の供給体制を強化しました。

現在、台湾には以下の主要拠点があります。

- 台湾銅箔股份有限公司（南投市）
  電解銅箔の製造を担い、スマートフォンや PC 駆動用電極などに使用される高品質製品を供給しています。
- 台湾特格股份有限公司（台中市）
  スパッタリングターゲット材や薄膜材料を製造し、半導体やディスプレイ産業を支えています。
- 日商三井金属鉱業股份有限公司（台北市）
  マーケティング拠点として、顧客対応や技術サポートを行い、台湾企業との連携を強化しています。

これらの拠点は、台湾のエレクトロニクス産業に不可欠な素材を供給する役割を果たしており、当社のグローバル戦略において重要な柱となっています。

台湾との関係は単なる製品供給にとどまらず、人材育成や技術交流にも広がっています。交流会や現地大学との連携を通じて、優秀な人材の採用や育成を進めています。例えば、台湾大学や一橋大学との留学制度を活用した人材交流は、現地文

化や市場理解を深めるうえで大きな役割を果たしています。また、現地採用社員が日本で研修を受けるプログラムもあり、グローバルな視点を持つ人材の育成に力を入れています。

台湾は半導体や電子部品の世界的な供給拠点であり、当社にとって今後も戦略的に重要な地域です。次世代半導体材料やEV関連部材など、新規事業の創出に向けて、台湾企業との協業や技術提携をさらに強化していく方針です。加えて、サステナビリティ脱炭素社会への対応を視野に入れ、台湾拠点での環境対応型製品の開発も進めています。

このように、当社と台湾のつながりは、製品供給、技術交流、人材育成の三本柱で構成され、今後も深化していくことが期待されます。

交流会で接する学生の皆様方は、総じて誠実な方々が多い印象を感じております。企業の方々との交流を通し、自身のキャリアを考えるために必要な情報を積極的に獲得しようとする意欲も強く感じております。

是非、台湾と日本の架け橋となる人材として、活躍していただけることを切に願っております。

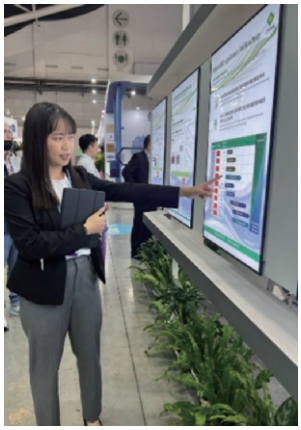
※三井金属鉱業株式会社は2025年10月１日に社名を「三井金属株式会社」へ変更しました。

インタビュー

聞き手：日本台湾交流協会総務部職員
話し手：林氏、木村氏

林 玥彤(LIN YuehTung)

会社名：三井金属株式会社
略　歴：2022年台湾大学文学部外国語学部を卒業後、2023年度日本台湾交流協会日本奨学金留学生現地採用に合格し、一橋大学国際・公共政策大学院に留学。留学中に当協会が主催する交流会に参加し、日本での就職活動を決意。2025年4月に三井金属株式会社に入社し、機能材料事業本部銅箔事業部に配属される。現在は埼玉県上尾市にある上尾事業所の営業課に所属し、主に銅箔市場における顧客ニーズに対応し、製造部門との連携を取る役割を担っている。



木村 晋(KIMURA Shin)

会社名：三井金属株式会社
所　属：機能材料事業本部 管理部
人事ビジネスパートナー室 室長補佐（機能材料事業本部の人事全般担当）

＜日本とのつながり＞

はじめに、林さんが日本に興味を持ったきっかけは何ですか。

林氏：そうですね、私は家族の仕事の関係で幼い頃から日本に住んでおりまして、小さい頃から日本のアニメや教育を経験していました。なので、家族の影響が大きかったです。また、中学校を卒業して、一旦台湾に戻ったのですが、改めて日本語を勉強しようと思い、日本に留学することを決めました。

幼い頃から日本に関わりがあったのですね！日本語学習を始めたのはいつですか。

林氏：小学校３年生の時に日本に来たことがきっかけでした。当初はインターナショナルスクールに通う予定でしたが、いろいろあって日本の公立学校に通うことになり、日本語はそこの先生に教わりました。また、家庭教師や塾にも通い、そして自由時間にはテレビ番組を通じて日本語の表現や日常用語を学び、先生や友人との会話で練習をしていました。

小学生３年生の頃に日本に来られたのですね。大学では台湾の大学に進学されていますが、中学校・高校も日本で過ごしていましたか。

林氏：中学校３年生の途中で台湾に戻り、高校２年生まで台湾で過ごしました。高校３年生からは家族の仕事の都合でタイに移り、残りの高校生活をタイで過ごしました。大学は再び台湾に戻り、大学院は日本に留学しました。全体的に非常に恵まれたグローバルな環境で育ちました。

大学院では当協会の奨学金制度を利用し日本に留学をされていますが、留学しようと思ったきっかけは何ですか。

林氏：台湾の大学では英文学部に所属し、国際政

治や国際経済の授業を取っていました。そこで出会った先生が日本人で、政経問題に詳しく、私もその分野について深く学びたいと思ったのがきっかけです。また、台湾の大学院に進学するとなると研究対象が欧米系に限られてしまうため、日本のことをしっかり勉強したいなら日本で留学しなさいと言われたこともあり、日本留学を決意しました。

大学で出会った先生の影響が大きかったのですね。では当協会の奨学金留学制度についてはどのように知りましたか。

林氏：実は家族も日本台湾交流協会（以下交流協会）の奨学金留学生だったため、交流協会の事は幼いころから詳しい話を聞いていました。また、専攻は英文学でしたが、日本語学科を副専攻としていました。日本語学科の教授の多くが奨学金留学の経験者であり、奨学金留学制度について耳にする機会が多かったのです。

日本語学科の教授が学生時代に当協会の奨学金留学生だったのですね！

林氏：はい。そのため、奨学金を申請する過程で様々なご指導・助言をいただきました。

林さんは台湾の大学を卒業し、日本の大学院に留学されていますが、日本と台湾の学校生活になにか違いはありますか。

林氏：日本はグループ活動や団体意識がかなり強いかなと思います。あとは個人的な印象としては他人に迷惑をかけたくないという思いが強いと感じました。また、学校生活においては、実技の授業（家庭科や図工､体育など）が多いと思います。そのような授業にも一生懸命に取り組んでいる姿が印象的でした。

台湾はどちらかというとアカデミックの部分を重視しているため、音楽や図工などのような実技の授業はあまりありません。その代わりに英語や数学をしっかり学ぶことができました。

そうなのですね。それでは台湾でしっかり基礎を学ばれたのですね。日本での留学生活は楽しかったですか。

林氏：とても楽しかったです。専攻したことのない分野だったのですが、周りの方に助けていただきながら留学生活を送ることができました。今でも当時の友人と一緒に遊んだりしています。

日本の留学先大学では何を学んでいましたか。

林氏：大学院では、一橋大学の国際・公共政策大学院に留学しました。研究テーマとして「東アジアにおける半導体リスク」を設定し、研究を進めていました。具体的には、半導体が国際関係においてどのような役割を果たすのか、またそれが戦争のリスクを高めるのか、あるいは低減するのかについて学んでいました。研究テーマを設定した理由は、米中貿易摩擦や新型コロナウイルスの影響に続き、ロシアのウクライナ侵攻によって国際情勢の緊張が高まる中、世界の半導体市場における供給不足の問題が依然として続いているためです。日本と台湾は、共に半導体生産において重要な役割を担っています。どのようなパートナーシップや役割を構築し、互いの関係をさらに強化することで、経済的利益と国家の経済安全保障に貢献できるのかを研究したいと考えました。

非常に興味深いテーマですね。台湾大学では英文学を専攻されていましたが、なぜ大学院では別の学部を選択されたのですか。

林氏：上述の通り、大学は英文学部でしたが、大学院に進学する際に専攻を変更したのは、言語力以外の専門知識を身につけたいという意欲があったからです。大学で学んだ英文学と日本文学を通じて、言語能力だけでなく、文化理解や解釈力も深めました。同時に、新たな専門領域に挑戦したいという思いが強くなりました。

このため、国際関係の大学院に進学し、地政学や国際政治の分野での知識を獲得することに決めました。これにより、より深い理解と広範な視野を持ち、現代社会の複雑な問題に対処する能力を身につけることができると考えていました。

＜交流会について＞

それでは交流会について詳しくお聞きします。まず、日台ビジネス交流会については何で知りましたか。

林氏：交流協会からのメールで知りました。メールが来るまではこのようなイベントがあることは知りませんでした。

参加しようと思ったきっかけは何ですか。

林氏：日本での就職を考えていた頃に交流会の案内を受け取ったので、何か情報が得られるかもしれないと思いました。また、単純ですが参加企業が大手だったということもあり、興味を持って行ってみようという気持ちになりました。

なるほど、日本で就職活動をしようと考えていたのは交流会に参加する前からだったのですね。

林氏：はい。交流会に参加したのは大学院１年生の後半、2024年２月の中旬ですが、その頃には既に日本で就職活動をしようと考えていました。ただ、就職活動を始める時期が遅かったのでまだ就職活動をどのように始めたらいいのか悩んでいる時期でした。

交流会に参加し、実際にどうでしたか。

林氏：参加企業は日系が多かったので、堅苦しい雰囲気なのかなと想像していましたが、実際はそんなことはなく、企業の方と気軽に会話することができて、非常に良い時間でした。就職活動以外にも、プライベートの話もいろいろと話す事が出来ました。私は人見知りなのですが企業の方が積極的に話をしてくれて、嬉しかったです。また、交流会に参加してみて初めて、日本の企業には伝統的な会社もあれば、和やかでカジュアルな会社もあるということを知りました。採用に関しても日本企業なので日本人の採用が多いと思っていましたが実際はそうでもなく、企業側も留学生を採用したいという思いがあるのだということを知りました。

多くの気づきがあったようですね。交流会に参加してみて特に印象的だったことは何ですか。

林氏：現在入社している三井金属株式会社（以下三井金属）がすごく積極的に会社・事業のことを紹介してくれたことです。たまたま担当者とお話しする機会があり、三井金属では理系技術者だけではなく、文系の方も様々なポジションで活躍しているというお話をしてくださいました。特に営業や経理は海外でも活躍していて、日本と海外をつなぐ架け橋になれるような人材を求めていると聞いてからは、さらにこの企業について深く知りたいと思うようになりました。私は参加企業について詳しく調べる時間が無かったのですが、実際に会話したことで興味のある企業に出会うことができ、企業説明会にも参加するようになりました。

＜就職活動について＞

就職活動について詳しくお聞きします。交流会での会話がきっかけとなり、実際に選考に進まれることになったということですが、就職活動を始めるのが遅くなってしまったのには何か理由がありますか。

林氏：実は、家族の影響もあり台湾で公務員になることを考えていました。台湾に戻って試験勉強をするか、日本で就職活動をするかとても悩んでいました。

台湾に戻ることも検討していたのですね。最終的に日本で就職活動することを選択されましたが、それはなぜですか。

林氏：日本はグローバルな市場もあり、いろいろな経験ができます。自分が挑戦できる機会もまだまだあると感じました。また、小さい頃から日本

のものづくりに興味があったので、私の語学力を通じて日本のものづくりの精神や品質のこだわりなどを世界に広めたいという思いもありました。また、現実的な理由として、公務員になれなかった場合、台湾の民間企業に就職しても文系の給料がかなり低く、自分が求めている働き方ができません。台湾では、たとえ良い大学に入ったとしても、残念ながら文系だと就職が難しく、学んだことを活かせる場があまりありません。そういった面からも、いろいろなことが挑戦できる日本で就職しようと思いました。

とても大きな決断だったと思います。林さんはどのような軸で就職活動していましたか。

林氏：私はあまりこだわってはいませんでしたが、グローバルな環境というのは重視していました。また、自分の語学力を活かしたいとも考えていました。

なるほど、それでは業種についても絞らず、広く見ていたということですね。

林氏：はい。業種についてあえて絞らずにいました。というのも台湾では文系が理系の業界に入ることはあまり無いためです。日本だからこそ新たな業界に入るチャンスがあるのではないかと思い、はじめから業種を特定することはしませんでした。

台湾では文系が理系企業に就職するということはなかなかないですよね。

林氏：そうですね、台湾ではどちらかと言うと即戦力が求められるので、実際にプロジェクトなどで関わった経験があるほうが大事です。日本では入社してから企業に対する理解を深めたり、経験を積んでいったりするので、専門知識がなくても入社することができます。

日台の違いはそういうところにもあるのですね。

林氏：はい、求められている人材に違いがあると思います。日本は入社してからの研修やフォローも手厚いです。また、１人１人のパーソナリティを重視しているのだと感じました。

それでは、林さんが就職活動を通して大変だったことは何ですか。

林氏：ビジネスマナーに一番苦労した記憶があります。台湾とは違い、日本は面接時にもマナーを大切にしているので覚えるのが大変でした。何度もYouTubeを見て繰り返し学習しました。また、日本で就職をすることを両親に話していなかったので、承諾してくれるのかという不安もありましたし、悩み等も相談しづらかったです。

そうだったのですね。ご両親にお話しされたのはいつですか。

林氏：内定をいただいた後に報告しました。反応が少し怖かったですが、素直に喜んでくれたので良かったです。また、父が知っている企業だったというのも大きかったと思います。

最終的に三井金属に入社されましたが、決め手は何だったのでしょうか。

林氏：最初は交流会で出会った松永さんという社員です。また、選考を通じて三井金属の様々な社員と接していく中で、皆さん優しく、雰囲気がとても良かったです。また、事業全体が環境保護を重視していて、将来性もあったので非常に魅力がありました。また、グローバルな環境で働くということも重視していたので、私に非常にマッチしていると感じました。

木村氏：彼女が所属している事業部が、台湾に大きい拠点があるのです。出来れば台湾の方に働いていただけるといいなと思っていました。また、台湾のみならず他の国とも取引をしているので、台湾にルーツがあって、そこからグローバルに働きたいというような人材を当社も求めていました。

なるほど、まさに林さんの重視している部分と企業の求めている条件がマッチしたということですね。

林氏：はい、運命的でした。

＜今後のキャリアについて＞

現在日本で働いていて大変なことはありますか。

林氏：やはり敬語が難しいです。今は指導員の方にメールなどチェックしていただいているのですが、実際の場に応用するのはまだまだ難しいです。あとは家が駅から遠いことも少々大変ですが、家賃補助はありますので、引っ越しも可能です。

木村氏：現在の拠点が埼玉の上尾にあり、大きい工場のため、駅から離れているのです。出社には良いのですが、駅からは少し遠いのです。

それでは、今後はどのようなキャリアを描いていますか。

林氏：私は大学時代英文学を専攻しておりましたので、将来的には海外の事業所に駐在したいと考えております。海外で異なる文化やビジネスの環境に身を置き、新たな視点を獲得していきたいです。そして、一定期間過ごしたら日本に戻り海外で学んだ知識や経験を生かして、日本でのビジネスに貢献していきたいです。

どのようにして日本と関わっていきたいですか。

林氏：ビジネスを通じて日本のものづくりを広めていきたいです。日本の銅箔がどのように優れているのか、金属職人におけるものづくり技術を世界に広めていきたいです。また、日本の職場における台湾人の強みについて発揮していきたいと考えています。

日本の職場における台湾人の強みとは何でしょうか。

林氏：多くの台湾人は中国語と英語を話すことができるため、さらに日本語を学ぶことで国際的なコミュニケーションにおいて大きなアドバンテージを持つことができます。語学力は、グローバルなビジネス環境での橋渡し役として非常に貴重です。「人が理解する言語で話せば、それは彼の頭に届く。彼自身の言語で話せば、それは彼の心に届く」ということわざがありますが、これはまさにその通りだと思います。

また、全体的に台湾人は文化的に柔軟性が高く、多様な価値観や働き方に適応できます。日本の職場文化においても、新しい環境やチームに迅速に馴染むことができます。異なる文化背景を持つ同僚との協力や、変化するビジネスニーズに対する適応力は、職場での大きな強みになるではないかと思います。

＜現役奨学金留学生へのアドバイス＞

交流会参加にあたり準備しておいた方が良いことは何かありますか。

林氏：企業の情報をよく調べておくことですね。話のネタにもなるし、自分が本当に企業と合っているのか、マッチしているのかどうか確認することができます。私もしっかり調べてから参加すれば良かったと思いました。

日本で生活するにあたり、気をつけた方がいいことは何かありますか。

林氏：公的な場所で騒がないということです。特に電車では、友人同士で集まってわいわいしてしまったりすることもありますが、日本の電車内はとても静かなので、気をつけたほうが良いと思います。そして、ルールに従うことも、日本で生活する上で非常に重要です。

また、日本人を悪く言いたいわけではありませんが、日本人はあまり英語が得意ではないと感じました。日本人は優しいと聞くのですが、英語で話しかけると驚かれ、逃げてしまうこともあります。そのため、翻訳アプリなどを用いてコミュニケー

ションを取るのがベストではないかと感じました。「郷には入れば、郷に従え」という言葉もありますので、日本に来るなら現地のルールを守り、簡単な挨拶ができたら良いと思います。

日本で就職活動をしたいという学生に向けて、アドバイスをお願いいたします。

林氏：自分の理想の働き方がある方は早めに就職活動を始めた方が良いです。始めるのが私のように遅くなっても焦らず、交流会をはじめ、企業説明会などの企業と交流できる場に参加したら良いと思います。また、履歴書などを生成AIに丸投げして書かせるのは良くないですが、生成AIを活用して履歴書を修正することは良いかと思います。そこからさらにAIに面接問題を予測させ、面接練習を繰り返し行うことですね。AIに依存するのではなく、上手に運用することが大切です。そして面接において一番大事なことは元気と笑顔です。緊張するのは失敗したくないという良い気持ちの表れですが、笑顔を忘れずにいることが大切です。

＜最後に＞

最後にお聞きします。日本で就職して良かったですか。

林氏：はい。三井金属は特に福利厚生も素晴らしく、研修制度や指導員制度もしっかりしているので文系の方でも安心して働く事ができます。毎日が非常に充実しており、会社のサポート体制が整っているため、新しいスキルを身につける機会も多く、自己成長を実感できる環境です。また、職場の雰囲気も良く、先輩社員たちと協力しながら仕事に取り組むことができるため、やりがいを感じています。さらに、仕事とプライベートの両方で充実した時間を過ごすことができています。このような環境の中で働くことができるため、日本での就職は私にとって非常に良い選択だったと感じています。